續古原

元

都築の系

立ち出でし笠井の向の長い井の根を尋
ねて行くに影ふみ分けて行くに影の系の絶
えをする一ときに草もなく二つ三つの二野草も
なく一野のふるふる友達影の何集て判
ずるに人をもなくなるの野
なるに つ[illegible]の元辰の[illegible]の柳 いや
お気月の桜[illegible]筆を[illegible]

一柳軒不卜

一番　芹

左　持

[illegible]

右

蛾[illegible]程けも根芹　工高

[illegible]は[illegible]の[illegible]の陰[illegible]芹は元
彼亀と[illegible]て泥中に根を引　昔國君と春年
[illegible]と云[illegible]も[illegible]て樂人に芹をとり芹
をとる左右垂優者

二番　白魚

左　持

[illegible]魚[illegible]　勇招

右

白魚[illegible]　松風

左同臆[illegible]て粉骨あり[illegible]右物[illegible]
[illegible]こ[illegible]と云[illegible]仕者
[illegible]柄[illegible]て仰[illegible]と白魚の幸情[illegible]
[illegible]仰可為持

三番　梅

左

[illegible]梅を指[illegible]かえて[illegible]蛾[illegible]　松濤

右　勝

三日月を梅にたとへたる　不角

暗香浮動月黄昏梅の精神性形を
をゆ　左も悪からぬ　あれ他にあらじ

四番　五加木

左　持

ちりぬるくるそりぬ五加木　峻水

右

ちりぬるを五加木にたとへ　扇白

左孤村見る来色と右ふけゆくを思ひとる

あれ佛とは白つゆ　紙持

五番　蝶

左　勝

いつくんく花子にあり　渓石

右

松枝にあり仙人の精　麥秋

松枝のあるじ人あり　何とぬく
袁保

六番　燕

左　持

落ちつり滝の水のもと苔すれ　一掛

右

乱れあしの中とてみをも見川　蔭ふる　心水

輕業双方類ふしてなして風流左右猶左と

七番　蔭むも

左　勝

ふる井戸也　蔭のさふ敬水の隈　仙花

右

をこかやしちはやぶる　頓て蔭のも　雨国

左　中とてみをもの続き唱て高く笑ひ

行ふ衆多ゆしてて自然の風流あり　右又

多の所を得たり絶も芸水の隈いさらて猶

八番　柳

左

天満宮の力多四十ぬ柳ふる　野足

右　勝

鶯の初つり蔭多ふ柳ふれ　琴風

右番逸三日月の初つ〻の句を上る墨て此句

寸二ヨ不蔭左も又要すハ仮仕ふ

左　右ふるきを和

九番　雲雀

左勝　[illegible]　魚兒

右　[illegible]

[illegible]　士[illegible]日和見[illegible]夕[illegible]雲雀　五位

夕雲雀毛[illegible]安やすく[illegible]似るもと袖に入雲雀
祖生一着の可為難

十番　木瓜

左持　[illegible]　[illegible]木瓜の[illegible]　危房

右

[illegible]　紅林

左右　[illegible]

十一番　木の芽

左持

[illegible]　朱絃

右

[illegible]　鴫白

右仁至[illegible]何未[illegible]左雖解定[illegible]言味

[illegible]く不分明

十二番　猩猩

左　持　真角

猩猩[illegible]孫望[illegible]白い[illegible]

右　不卜

[illegible]猩猩[illegible]山猩

左右[illegible]生田の[illegible]鳥も[illegible]と

[illegible]も[illegible]筆[illegible]墨の

[illegible]の[illegible]不卜子[illegible]富の句[illegible]を神

[illegible]判も[illegible]他の

句猩[illegible]左臺右鱗筆小事[illegible]

是[illegible]雅の[illegible]世[illegible]是非

を解人猩是非の内を出[illegible]判[illegible]

[illegible]人又[illegible]判の判も判

[illegible]卯の[illegible]

素堂　遺

一番　卯の[illegible]

左　持

卯の[illegible]里の見[illegible]朝朗　露佐

右

黄なるの聲中　絲竹の調　不卜

左い玉鉾のこちり人も卯のもの白妙なる
行里を見ずて足を止む一枝瀟洒出蹤離の
なる色自然に深なる春に結ぶ右ハ時節の
移所光声に呼べとと清氏の女のこゑ
さへも留て自保ちもとそ模陵のるゝ乱

二番　麥

左　持

ゆゝ面に牛洲ゆるる麦野に　松風

右

麦野の面に牛洲ゆるる麦野の蓁風なれ　調物

奥ゆかしく左いまるふの蓁風と見る所ハ
意味ありて也

三番　琴

左　持

頭根らり琴ゆゝ一風ゆる　全琴

右

ふふ井戸に笛ゆえ一且ゆる　不論

琴の物と思ふて奥方一風も見ふ巧也

又住すまゝ　古井戸の中より生出ふ八重
もありて軍に行るゝ共左の宗旨ハいつゝか
おとりまふ所も見と付ふ

四番　田植

左

蔭の葵ふ亀　押ゝふ田植ハ　立出

右勝

折ゝの時節ゝ面白ん田植すれ　兼言

張世子ら軍生の田植引連こゝ詠ナすと
思ひて詠ゝ　左も一作常かゝぬ所者也共右の
句の詠ゝもゝ是を引方ゝ有りぬ

昼夜の中絶ふ草屋毛長ゝ　調義

夕夜ゝ共名ゝ世さゝく茶和ナ有ふゝ
昼夜ゝ共美ゝ化ある花有ふと　景
草屋毛中ゝ　左右共ゝ

八番　蛙

左勝

一節ハ煙ゝ中ゝふ蛙ハ　立嘉

右

霧ゝ多ぬハ野ふ毛の蛙ハ　流石

左の句煙ゝ中ゝふ一節の煙遠ゝ

[illegible]も品高――右皆れき舟の[illegible]孫り[illegible]芸左
[illegible]

九番　町

左　特

岡伽藍りおとり衆ふほ[illegible]衆　峻水

右

かーはき滝の中れふ蛍すれ　心水

暁毎のあら猶さ跡を[illegible]舎衆るいふ[illegible]
[illegible]
かーもあるもみ[illegible]

十番　蓮

五番　百合

左　勝

喰殆す厩の内の早百合れ　一排

右

五月雨すこ[illegible]百合のも　破笠

左[illegible]
[illegible]
[illegible]

六番　[illegible]

左　特

[illegible]尾

[illegible]尾[illegible]旧[illegible]

右　扇雪

蝶一つ見[illegible]ぬ[illegible]尾の蔵うん　西国

古墳の[illegible]尾[illegible]向ひて[illegible]蝶一つ

見[illegible]ぬ[illegible]いつまを[illegible]

かく[illegible]

七番　夕鳥

左　持

夕鳥[illegible]を落[illegible]

右　去来

左　勇招

雷[illegible]

右　野言

[illegible]

左の[illegible]白[illegible]の雷の[illegible]面

白[illegible]右[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一番　涼

左　勝

船をやとひ碁をお源氏　不角

右

さかもり申候て十五夕さしき　琴風

左いとゝ多数蔵さ舟をやとひ清水の碁を書き
高さ二寸ばかりの中よさ人を陪して見物を
又申左よりこの右い禅さつ者さ作き高程の姿
さる板うかべ新さの名ふ諸さ碁ーの五番
能墨色色色色も左の細源氏ーいおとりて
見さ作る

十二番　清水

左　特

帰陣して墨ーふ人の清水氏　風水

右

ふゝ越さる又多寄さ南る清水氏　嵐水

左いとゝ少多所さ二氏色作ーふ向こ高多の
寄人の高さ牛ーさ高ーあ及水鳥跡を留さ数の
ニ色色竜色色色ーきさ右い立戻ーと云
さ清水の碁色中ーー寄色色此ニ作色
限ニさ能特ーと書ゝ也

調和

一番

左　勝　さつ秋

文月中陰を感ずる妨屋の内　長角

右

安さ敷のこゝ行うゝ面さ面縄さ　嵐雪

左ハ琪樹西風秋篇草秋とゝ云ゝ秋思の情ヲ
自後て新原至ル國中竹婦人の竜ゝ行ゝ面
ふんゝ色感る字もれしゝかゝ右ハ眼さハさゝ
かて見さ孫ゝ毛其心思ひゝまて風動ゝ
縄さゝゝ霜寒ゝ凄ゝ切ゝゝ
肌骨ヲ通りて耳ふさ毛ゝ此番秋の巻頭
ゝ行ゝ色ハ左ヲ勝ヲ行ゝ事さ有りぬ

二番　露

左

朱絹ヲ落て水ゝ行の露　吉川

右　勝

ゝ行ゝ面行ゝ行ふゝ野一ゝ式　嵐吉

両句共ヲ露ヲ能ゝ面ゝ句粋ゝ面ゝ
ふゝ右の野ゝ全神読譜ゝて一句千里の意
有ゝ行ゝ左ハ判者の以ゝ中ゝに面ひて水ゝ
ふゝゝ

三番　稲妻

左　勝

稲妻ヲ行ゝ行ゝ行ふ兎一の形　大笑

右

稲書すかくさぬ俤の舎すか　不角

左　稲書のすかすあさ光さ繁さて歌の俤さひれ
良けさやさあやさ二の中さ色と思ふさりけん作
者のさ新のんさふさえさもさうるかーー
さ　かさすさ　ーー　右も彼亦の
上さ木根海さ京さもさ色ふさこされさ京されさ住
屋男ひかさもさて僧の右りさ稲書のさりあし
世の常のさ面さ見さたあさ左さふなすし

四番　鶯

左

苔間中風ふさ苔ふ苔るの色　蚊足

右　勝

代あすけさ　ーーさ面さ苔るのさあすふ　扇雲

左　経信卿の中の稲ふおとつまてあすふ
ふる面のさ風此作者の俤
けさ右の稲書の苔るのさ
あやふ三俤の一つさ俤
さもさ俤さ定む　ーー

五番　鶉

左　勝

甲なすさ少つも森鳥の鶉ふん　琴風

右

聲係ーー鶉ふけ草系　佐荷

左ハ鶉の[illegible]風雅なる[illegible]の野辺の秋
[illegible]感情有右ハ[illegible]
見[illegible]左[illegible]

六番　詞遠

左　調柳

照月[illegible]

右　勝　詞遠

寺〳〵や清[illegible]

左の歌の五文字上の二句ハ能よりあひ[illegible]
詞遠の歌ハ向て八上の二句詞遠[illegible]
くとこゝ[illegible]

七番　薄

左　持

[illegible]

右　牡丹

[illegible]

左右共ニ[illegible]

八番　[illegible]

左　持

昔のてうを焼くに八重一重を取るを　拳白

右

外物手足曳うぬふを取る事　注石

左の焼くに八重一重を取るを立みよの花みいるふるを
なるう右八井特友都う重を足曳くさり　すと
いひりるを粒人を取るの一重を東の二重に八咲
えも及ぶ者人重の一重の赤類よりて左右
共手疑重に似たり仍特と

九番　菓

左　特

菓のそふ菓の阿ふ草のそふ　文麟

右

午呪こう旭先こうふ野菓をふ　石ふ

菓野さくりさくるる見ふそもそ特と

十番　菌

左　勝

虹をえこう跡を尋ふ菌の郎　勇招

右

こもこさく蓋こるわもこく茸ふ　西国

左を毛こ侍く湿をふく多る菌の郎

右八芽將山差山奇の芽うゝも仍左を勝とん

十一番　秋寂

左　持

秋ハ只うゝ海の日暮ゝ　一排

右

秋有里聲　雅年寄も四池の亀　不卜

秋ゝ長天と共に一色と三尺の童子う笠量
をふるひ一も日ゝ思ひ思ひ
又他の亀の方眼の後延も不易の形体ゆつ
見も目出度作ゝと共に特とゝ
筆をとゝ仕りし

此評ハ土番迄ゝ土番ハ古本ゝ

洛陽　湖春書

一番　落葉

左　持

落葉ゝ数ゝの葉ふゝ重ゝ　風ゝ

右

落ゝふゝとゝ不二の時ゝ塔一川　松濤

左の句景気微細にて語をかざり右又
山もあらぬ風に不二の詠一句の光も出るか
に聞へ侍れど是も昔句中眼に見えるに
切字なし五文字にて云流したる也切字加
へるべきにや推て勝る所も難して持に定
付くるる

二番　霜

左　勝

親と子の霜枯をかこふ野づら哉　渓石

右

霜深し赤ふ生をかへる枝の船　勇柏

其の生をぬくるもの躰すら衰ふるや歌の
子を思ふと詠なし此家は傍して野辺の子
をいたはるさまやつ之右の句さもあるべきに左
句素逸にもてはやし侍るべし

三番　夜興

左　持

わの登に月影わかるる枝興哉　工翁

右

いつも狸得失覚えずたもなし　文鯨

左の句茂き深くなれ特人の形容いふらしきあ
なり右の句姿はなく何事かに聞へ侍れど是
に得失まさかるし　依て持とす

四番　枯野

左　勝　松野

枝苗も枯野の目ふ川あるゝ　松野

右　全峯

石橋をかも野と後生入日すれ

左の句本枯の吹ちらして苗枝のうゝとゝ[illegible]る
野のおとゝの目ふ川あるゝ　右も文枯野の風
姿をふゝゝゝて一句の文ゝ　景見枯すゝく作也

五番　細代

左　持

子を連ゝて枝の細代ゝ養枝ゝ　仙子

右

細代本のゆふき止ゝふ永ゝ那　不角

細代の床ゝ子を連ゝふ作ゝ陽ゝゝ
枝ゝゝ右ゝ細代の枝の茶ゝ家ゝ寄ゝ弥猪
多ふ乳色左右然ふふかゝ

六番　石蕊

左　勝

破ゝ毛ゝふの石蕊ゝ鳥虫ゝ籠ゝふ　調柳

右

石蕗さくや誰か曳捨し雲車の跡　立些

左の句以さちとよむなしき方を見おこせてふ
ところあんをの薄も思出されて哀れしく侍る
かし曳捨し雲車の句意あると不可作以
左為勝

七番　鴨

左　勝

短鴨の聲にふり渡る月寒し　嵐雪

右

鴨らそて菜を干拾塩屋かな　魚児

十鴨の声ふり渡る秀句限なし一句押す

かくして嵐雪の景色をうたひの彼蛛手の歌
を取千鳥も古月廿四日の日も寒しといへるさ
由よりつくし右の句は蚕飼この詰ざるため
しなきにまつ其ずる鴨の声句調ある
由とも申さん

八番　氷柱

左

風耳来て伝ふ氷柱がかる楓かな　一排

右　勝

門守の保居をしえるに氷柱哉　琴風

氷柱すさの見楓木のうみ風に景色ありかくかな

ひとりの衰翁ありて右は狩煙なんどもせず世津の
のなかい永柱の門をはなれる宗居の扉感情
はなれるなるかゆゝるを覚ゆる

九番　霰

左　持

あるつきの何ゝ毛をみるの伝ふ神　李下

右

春深く野に雪の残迎あるまうれ　伸風

梨風寒威暁の霜覚えの誠ふるとかく
さるハ世をも何ゝ毛降ふれと呼声霰〳〵
右ハ又おくるの雲を紙ふるみ能ふ叶ふり

写所見る師曠の耳をもてゝ離婁の
眼のさやかなるを云共左右の是非辨すふ
事一何ゝなり

十番　神楽

左　勝

伊弉諾尊ゆゝを奏法ふ有如ふ　去来

右

鈴ふ手文持て弱ふ弟乗式　孤屋

左の句さる難もふく柔〳〵ふ所も見えた
右ハさら叩弟乗ふ中一ふ角〳〵事
川ふ右さ難ふふをもて左方勝ふ

十一番　頭巾

左　勝

山里や頭巾とらぬ人もなし　　京　観水

右

頭巾きぬ出家見てけり野中哉　　兼言

眼にふれぬ山中の容子詠て興ありけり
楓林に何から右ハ眼にふれて聞く凄き冬野の
法師人ニハ思ひもよらぬ心にも有ならん左
勝とす

十二番　すゝ掃

左

何方に行らむ捨人すゝ掃　　峯白

右　勝

すゝはきて寺ハ目出度佛かな　　不卜

すゝ掃の日の様ふ変を佗ひるも優にして聞え
右ハ寺のすゝ掃も思ひやりあるに先祖重ねてや
両句滑稽の識をこらしあれは感心わきがたくは
いへとも目出度佛ひかれたといひし句の心をほし
猶まさりて寺へ勝をあたふ

一 柳軒不卜ぬしハ身を塵境に随ひても志ハ
雲井の山のいたゝ根を見やりあるハ芳野の花に笈を
志のひ湖水の月に琵琶を浮へる風雅のやつし二疑
ふ事年〻季是より生も集ありまた今再
に及よりも春秋さへく雲ゐ雨ほとてつる

東籬の菜も各〻唐朝の牡丹もた
ちまちに美を尽す梅の侘さびの奥も折ふしの
時を分あつて句も亦人を驚ろかす牡丹芍薬
の花の香のうるはしきに色こそ木の葉
を捨しかたの左右なきあるを積て四節に
判士ならんかしも亦其一ツ也こゝにあるかこの楽ふ
ゝ〻ふこゝの笛を吹むて似るものとなん云
青鷺の目をめいあふむの口を戸さゝん事難なん
負亭卯年筆を江上の閑に濯ぎ終る
蕉庵雪夜の窓下いとみ對す

祝書書

入相の鐘の響きを見すふ柳かな　調和

藪の一重に蕎子飼ふ家　不卜

陽炎の市に蹴跋の一る色　拳白

ふゝと小唄に母を忘るゝも　不角

三日月の九くあるゆゝて草ゆゝ　渡石

雪薄き花八重色き舟の火　勇招

足ゆゝ破らゝ寺あそきこ　卜

笠に薤の実を踏ゝ　和

大内のすゝ掃没の巻　角

森もせぬ髪を痛く乱るゝ　白

石の月を泣の小陽女とぞ思れ　昭

あはれ陰なるゝ火鉢の屑　石

中陰も程ある苔のわすれ草　和

あゝ名の牧居すゝ乳ふふ兒　卜

一度はおもひ信ん七面　白

今年そのりは吉京の烏　角

いつの苔いつの月ぞ盟りして　石

蘇見ゝ中ゝは醒ぬ夜の香　招

いつもゝ春紬とめてゝ増しゝ　卜

目出度さあるふ殿の伊人　和

藤原く宮居桂皮て菖ふえて　角

ゆを半て二藍の庵　白

蝿ゝゝゝ森妄氷室守　招

陵と之祭五丁余の道　石

あゝ自を根ふゝ送ふ瞰妻さ　和

若元喪を張て雪て日雪る日　角

晨明ハ入色ものの縫ひ根ふ　白

あしの根ひ須ヒ　卜

黒鳥の古巣おしの出る後清み　石

ゆ　程ふ　特　招

死きぬ僧の山りの淋中　角

清陽の笠外ふ野辺の望ふ　和

立ふ羽を鳥ふ雉の声　卜

曲ハ　淋あ山ふ　白

茶人ひ苗賣ひ今の山　招

雪のふむ京の草鞋　石

○

桜ひ釣鐘のふ尾上うれ　支磨

春日ハ草ひ落ふ野の中　峯白

鶯実の籠の軒ひ赤ぬまて　不卜

岩の多ひ見ゆふ鶯の巣　渡石

月の山ふ秋の浪のこと　松濤

暮れの清のふうらの虚家　九

古欲の末を思ひ城ふ秋の旅　白

雲を見果ぬ狐入の雪　卜
狐うの中一甲斐の長度の契　石
ちまきの名あふ草の外うた　湧
艾葉麺もはもしかうふ裏山く　九
臭のくさほとの泪ふ中セ　白
かさあり小袋あふ僧の笠ゆ　卜
鹿鹿の常平寺ふ茅竜　石
鏡物のくさ色落ふ雪の跡　湧
昧死ーてらり美豆野月九ー　九

芸ると泥中ぬ冥の森くて　白
書あるとり山あふ左近の裏　湧
夕あるくく夫刻の橋の鶏くく　九
下戸の酒屋ハ赤くすもの風ー　卜
聳二人獨平　遠ふ知七四　石
山閑るかて　紗臺の入り　白
歌あくくく今宵も秋の雲　卜
思ひあるすむあと良の養戸　石
嗜平年孫くく妻の袋かくり　湧

因獄おく日い盃の黄昏　九

と食とも世ハこゝのゝゝぬ月の影　白

芝見すゝれし下京の秋　卜

おれ〳〵野ゝ菫土筆と並居ゝゝ　石

蝶ゝ土ゝゝゝゝかもい未の子　陽

寺の垣も所のゝゝゝ原氏亀者　九

樹をめゝゝ櫂ゝ背ゝし　白

真間寺ゝゝゝふの磯をゝゝ縋て　卜

捲女のゝゝめゝ亦背ぬ世ゝ　石

青秋もおれ〳〵旧の姿の色　陽

鏡ハ老をゝゝぬゝこゝゝ　筆

。

亀山

石の雪色〳〵年年柳ゝれ　不角

ゝゝふゝゝて二月の空　一排

青函の情ゝゝゝふ野を志めて　次喉

清ゝゝ蝶のゝゝ飛〳〵れり　扇雪

晨明のゝふ程暑を細代笠　琴路

ゝく見お後ゝ京の節水

意はるふ泊て雪のきえて　不卜

名をあらそふ住　傾城の菴　山

折もてあふ夢さめぬ　角

不破をもとる黒髪　掛

元人を遣て送ふ秋の暮　喉

月は一のくに常の米賣　雪

そ多れく武帳の外つ是もなて　風

旅年もらしやも雷のとゝ　卜

京宿の水掉てさゝふ芭蕉　掛

奉加てさゝふ餓優の舞　喉

三ゝを迫位清ゝふ子の別　角

柴所ゝり音のゝゝ餓鳩　山

落め程足跡のあと嵐山家の雪　雪

角を義ゝ見遣ふ　庵　風

優婆塞をゝ年も杏乃羊ゝ　卜

ゝもれく生ゝて玉を懸家　掛

半月を賞ふゝいとふ都人　喉

勇ふゝ暮ゝ豊の世間　角

陸走りも踏みしめぬ馬の足　山
去のふるもの貢の衣く　卜
山寺とやとふるすもて　風
屑とす踏しめし主の竹の　雪
負ひ去の泪かくて琴ふる月　梶
佛を濡す　盃の白酒　山
人初の庭の色かきふるや　角
入日の鐘の響つむとかつき　風
去り遠ふこを去をもて　雪

僧の叫ぶ兒の泣い　喉
芸見をも惜しの程風の音　卜
都の夏の京の青柳の菴　筆

○

明星や惜さうめ男山すつ　其角
詠ものの月の陽炎　唾水
立雑の跡の入ふ犬の縄解て　琴風
おのう嘘の赤金きき丈　扇雪
水きき厠の下を引隔毛　不卜

涼しさ[illegible]

一排

旅衣集ておくるゝ[illegible]

水

佐[illegible]あるを[illegible]

角

盃の妻迄[illegible]あるゝ世ふ

雪

田植を主[illegible]ふ[illegible]の妻

風

呆[illegible]ふ[illegible]る籠て催ーて

排

人の紬て[illegible]お[illegible]て春

卜

水雲の僧を[illegible]ふ[illegible]

角

いさあるを[illegible]ふ[illegible]早中の麻

水

紫の糟[illegible]も軒の月[illegible]

風

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]墻の百瓢

雪

花さそふ盲醫の[illegible]を[illegible]

卜

さゝふの朝ふを舍利唱ふ

排

山城の小便賞もたゝしの

水

雪見て歩[illegible]く紋の傘

角

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]草を尋[illegible]

雪

菴を[illegible]ふの蓬の陽[illegible]

風

おゝ暗の卵わふ音[illegible]

排

年年樂やすらの明不め　卜

高人の夫の宮年祝せん　角

夫婦の上戸新　さもすい　水

狂言年作る名い　婀まを　風

いとしもさを陽草の寮　雪

月見る貴一る見んとさふん　卜

素年歌の後巣のうひを　榊

牡一花年楠葉安野のあき保ひ　角

月見る魚巣の伽と余川　水

巣巣のる結鳥の四高あ年て　風

屋取えさ國府の陸諸代　雪

真人のからい音花の外　榊

雲ひさふ水の各所　卜

追加

赤榊芙蓉さけて榊年和　不卜

羽年角の高あ榊の集り　琴風

白鷺の伽ろ長原角年伽て　長角

酒をすすめ給ふ　橋の三階　卜

明ハ又師走の月のおしさの　風

雨吟しもく弱を寄へ　角

うち廣く海を越ふ一うつの山　卜

雪隠とつく　枕草の軒　風

銘をきふ樽の鉦鼓の音ふりて　角

蜜の奉加を松魚とふこ　卜

けもしくの祭の芋茎岐ふ　風

あふ鏡を顔をふくさも　角

加川紀之年一但の数を泣きしを

忘ハの富を梓をやふ　風

指をきぬ杖子の親の恐ふん　角

かもしく蔵ふの器の麦　卜

月花の瑞をふふ歌の名事　風

著の秋保を案合の僧　角

袁ふふ鞠の女の魚をひ　卜

蠅を飯屋住ふ男の寂しを　風

夕立を恥しこのぬ吉　角

佐藤の早歌 [illegible]　卜

佐鯉の庵にやすらふ望むる　風

大根あさるふ畑の見渡し　角

皆蕾て何をかくも雪の舟　卜

足袋はいて俺ふ冥るる妻　風

色ふかく聖に紅をまかせり　角

毛の男ふ日ハ猶のまふふ　卜

世の月を羨む歳に飽まく　風

佐〻ふ京祇〻雅ふ秋風　角

中〻ふ[illegible]を[illegible]児の[illegible]迷

朱柱の堂ふ北の透垣　風

男殿藤に忘保を傾きて　角

既に〻の月の窓の盃　卜

佐野の[illegible]の御影の花衣　風

山上にあふふ雲の吹　角

春

梅ゝやゝ附るゝをそらが雲　不外

松とゝまる宮の旭と紫ふり　不角

吉沢の芹ハ巳つ毛の白ひの京　立高

紫草ゝ又赤雪ハ芝高ゝ柳　景道

出ふゆ野を若草若葉式　文子

花ハゝし黄ゝ上野ゝ　調柳

日のくもゝ梅の花喰ふ鶯の柳　松濤

散ゝ毛ゝ毛の毛見る椿ゝ　活蓬

弱ゝゝ雪ゝ雪間式　峯白

春漸

竹の香や柳を尋ね藪のゝ　青角

おゝひ出ゝ物ゝつゝき柳ゝ　戈丸

青柳の京ゝ星の歩ゝゝ京　一芋

風京ゝゝ京ゝゝ岸の柳式　勇招

角田川ゝ

多志ゝ一風を吳ゝ京柳哉　不卜
青柳や行沓中ゝる上ゝれ　調義
削ゝ掛ゝ夢のおとゝす軒端哉　立望
家家の奥やゝる見ゝ京菰哉　比竹
門ゝの雪をはゝく孫ゝ菰の柳　渓石
玉許の扶ゝふゝふ夢ゝの郭　調柳
雨の日や鶯ゝあゝふゝ菰　扇雪
雨あ見のいゝあをくゝふ菰ゝれ　重元
小ゝ京ゝゝを書ゝ千せん雨のゝう　峯白

25

市ゝ程のゝゝの數ゝゝ京隱す柳　一桃
家家ゝ遊自ゝめゝふゝあゝゝ哉　不角
引詩の是ゝ中ゝゝふゝあゝゝ哉　不卜
小紫京ゝ家ゝを張子の姿哉　由之
浮ゝ世ゝ何を京あん夫ゝゝり　一桃
梁の幅見ゝ侍ゝゝり青の雨　琴風
遊ゝを家ゝ昔ゝ中ゝゝふゝ雉ゝ郭　蚊足
夢の菓ゝ見ゝゝ京ゝ堂哉　不角
是趣の白ゝを英ゝ菴の風見哉　峡雨

山吹や秋の雫こぼす四十九重　文鳥

京の花の芳しさ千さ色を傾ける　宇高

垣の梔張り出すの社盛りの頃　蚕山

強のさはるる程く千年を苔　其角

梔の日や女供の昼寝　琴風

もちち搗こなす二日を雛の内長閑　湖柳

忘れ貫ハ懐炉灰蒔のくすぶるの式　立圃

汝子と雨すくもを金ふる毒虫雀　不角

降るつきの雨ぬるをを身の社業式　李下

まくしこの冠子茶の歌ある雪羽式　三園

物皆自得

花子拾ふ蛍ちくひろ友さめ　芭蕉

月後若影上探干

月影のひと植ゆふ梅の邪　不卜

弱ちく〳〵続子おこ蛙も梅　文鳥

山さくら住を佛ふ多り式　蚕山

蛙の子子ハちく〳〵梅の邪　流石

ち梅風子毒色の傳ふ　一晴

見るゝ―也 折ゆさぶる―山猫　琴風

さくら咲も一末ほゝゑみさくら　拳白

立寄る寺の名をきく猫うれ　調狐

常ゆるく鞠見るふる寺の猫うれ　蕪吉

寒ゆ八ゆの影ふさゝ寺　梅雀

行隙もなるハ雪ある猫うれ　湖舟

憂ゆも花ゆ生るふゝ家ほゝめ　調味

別るの俺―き蓬の寒ひうれ　由之

ふゝ鞠ゆ孫喜のゆふ―ほゝ　湖舟

也ゆ―ゆ八燒地ゆ家ゝほゝ　三星

菴不ゝ和ゝ峯ゆ八時を白ほゝ　洒石

蕎

三月二十日當三十日
陽光別亭苦吟月

大酒ゆ起ゆゆを夢後ゆれ　其角

根八只ゆ芝栄ゆ山を牡丹ゆ　拳白

亥亭を亥ゆ

彩貝の二葉ゆゝ―男　旅　洒落

時雨ふりて羽子落しの音不聞　三谷翁
卯月なれ雛の節の花曇　活蓮
顔撫て中秋の彩　立世
緑草さゝく女の早苗哉　湖味
返す袖香ゆふぐれの蛍哉　湖義
子を負て夫婦帰るの田植哉　沖石
蛙高の中くゝ蛙哉　五月雨　和子
見る人を手傾ぐ早百合哉　朱絃
おさゝゝかに夜の雨一叶哉　支麿

草の根ゆ蛍のぬくもる小雨哉　雨国
花藤くゝもゝ撫子の手哉　一那
時の菓子青茨あさるゝ小雨哉
雪ふる夕も人ハ恋ゆ時雨哉　湖舟
雨早ゝ二尺雨ふる木も中くゝの色　不角
寄ゝ神松を柱ゝ中くゝの声　梅雀
思ふ神鶯一声戸麦の中　雨国
松陰ハ雪ふる日を涼ゝ哉　蚕山
寺籠くゝ雪を中ふ二の動ゝ哉　琴風

去来ハ秋ヲ告ル涼シサヤ　由之

扇ヽ手鐘の尺見ふさ〻ぎ　仲風

帳ヲ開ル陸奥ヶ涼シ　蕪吉

夕涼ヽ鞠を見ん小あ〻ぎ　峨眉

分を安く蚊を聞ル涼シ哉　扇雪

百八(ナイタン)の声ヲ撞ヽ蚊ヶ遠ヽ　文子

涼シ哉ハ秋ヲ待ル延小あ〻ぎ　不卜

日ヽ川遊ヽ精水ヲ　牡蠣

ヽの矢ヽ中日影を走ふ牡蠣賣　不詩

ヽひさ高く秋ヽ蓮ヽ川ふ八賣　蕪吉

昼鳥ヲ朱鳩涼シ哉ふり　芭蕉

仇一ツ外ヲ欲ヲ子供ふ　不詩

冷ヽふ仇の水ヲ汲ふ

猛暑の表を去ヽ真蜜ふ　不角

常夏を見ぬ羽織の暑ヽ　三園

冷ヽ中夏の真昼のかまの色　工系

夕立ヲ尾上の寺ハ拾ふ　琴風

夕立ヲ蓑面の隠を濡ヽ見ん　洒石

夕立すぎぬるの賞小舎ある　不卜

秋

六日の歌続えしゝや　女七夕　不角

七夕を法師の息子男ぶり　扇雪

傘五の日和を星の手向ける　沖石

扇出すゝ幸星の別れしん　琴風

筏士のそゝかを安き相撲ある　不卜

そゝ哀の踊子踊しゝや　角力夜　其角

何さ良やおしの君子を笑しゝ　支麿

鶏鳥の蔓子子を笑ふ蔓弐　古川

帆柱子雉這ふ子鶏を　徊柳

雉の白い茶を嘗る傷ある　立坐

何さ白子小見の巣を名のゝ　梅雀

雉や半妃嬪しゝ後ふ　徊義

子蔓を妻八特猫子寝子行ん　李湾

ふゝ丹の晩日おと後く河鼠弐　比竹

品川を鰍そゝ氣しゝ稲の花　硬石

ひく程秋の日向遊び秋の魂　琴風

松虫の声さびしくなる恨哉　夕口

草の戸の秋雪降つく惶る秋　不卜

草庵の蓑おとなひの音ならん　伸風

上方恋情恨とやらん所ろ哉　鵜白

駿馬ふらふと柏子ろ鳴ぬ秋哉　扇雪

雨の降ぬ夕べ

きふの月夕見そめ墨くゝ鳴哉　不角

暮る計雨の月見る海嘯哉　立笠

義鮎のうるかふやうなり秋哉　一瀑

栗ハ名のいはれ丈菓の九月哉　不卜

思ふ事も菓自ら茅屋の秋　夕口

楷の実ふ性を蔵ふ絲哉（子トリ）　蚕山

おとれとゝ毛ぬ雅中九折　三翁

我イとるゝ茶碗の中の名地蓑　夕子

ふゝ長の松ゝ六おうぬ子種哉　拳白

痩牛ゝ紫身ゝ秋のすゝ哉　調柳

とる虫ゝ袁ゝ毛ゝ秋の不二　不角

冬

暁の星を迎ひ行き霜うれ　勇招

女ゝそ〻ぬ甲の時雨こゝ　文子

葡萄枯る壁をめぐる菴風　琴風

見こゝ初まて蕭条を悔む淋うゝ　活蓬

蕭条ゝて世に限逸の菴もれ　調味

竹の長ゝ年ゝ〻ゝ雨ふる音　不角

陽のさゝ年月のさかりうれ　柳甫

為蕭条特の声寒ゝ夢ゝ　立哲

聖ハ三里霜ゝり出ふ龍　白楊

霜の結夜奥の犬の吠うゝ　工高

杜を訪ひふるゝ

霜る一竹見ゝ年ゝ色ゝ　芭蕉

海中ゝ霜ゝ色を何ふ板のこゝ　戈九

竹の冬ふの霜ゝ寒ゝ風　活石

川越ゝ入るの尾をそゝく氷柱うれ　琴風

昇ゝふ日い氷柱を（　）ふ光うゝ　活石

帆柱の氷柱見るも旭哉　世角

雪を踏て後の雪のあしもとや　芭蕉

雪やしの門を掃ある夕ぐれ　其角

草の戸や傘さすあぬ雪の暮　拳白

垣越に児と雪こ川法師哉　嵐雪

漂木にうり夕ぐれ早乙女千鳥なく　一桃

芭蕉庵にて

菜拵に蜻蛉むく蜜の味哉　不卜

掃捨や鶏雛を追ふ掃の音　立圭

香の物にて掃て負ぬ世の長閑　和水

蛛ふるふる深海の火燵哉　洒山

年とりて掃さく園にかくれ　梅雀

行年に紙子を縫ふ竹山

わら貧を墨毛ありし年の暮　扇雪

坐右銘

行年や壁に恥ぬ書　其角

貞享二丁卯年梓行

文政二巳卯年九月再梓

江戸　橋梁雄嶺

栄沢　晩室晃峯

嵐亭　柳々

都て業の弟は貞享二年丁卯の春の撰集なるに其風俗の変なるもいとゝ麗の業り板なれど今の標題の孤也傍ふる写本なるに賞事なきもいとゝ山時氏霞峯等の秘伝の巻なれば其一集あり其ハ風さよ不卜曽の撰なる歌集の

原ものを昔を見てふるき志の跡を押し
はかりてふるき記板にのぼせ世をふる
舞を尽し亦志の本をふかくはげまるる
ものを時を降さるれば業おもおもし
文政二卯のとし拾遺雅頼はじめて羽ふ
節を畏の章をとりて此集を
頼と号る頼降を曰復玉を深の蒸物
とかくに似ることもとて多異の学者
聖を師とし写る取を捧とりふ為よ

山道の蓋むかるる所を踏るものを
おて仰さるべき人百業の石を生し
る百業の往昔より今日に
飛琴柳にら除くに打ち此雅頼ら道を
志ひ人ひ不卜世の意を讀きく伝り
切なるの古を学を凝しる新ハ集の
再生の大道をもん学あたしまる
山よりを平よ業をいるもとより
あるかの古堀る彩よ生ル其業の

鱸くゝ何ゝふるすゝきゝ稲舟の
いなみ山くゝ言出川の原松川の流
くゝ雲とゝ月日ゝ見る暁ゝ嘉和歌
亳ゝかゝて澤ゝ書る

上山沢波和藏書

續北原

再刻

後都築の原

高梁雄顕選
晦室羅峯校合
山風鷲神〻